

M氏ノ運転シタ風景ノ記憶①

「今年も紅くなってきたな・・・」

僕を連れて仙台に行く列車の中で、こうつぶやいた。

そう言つてすぐに、父は、隣のおばさんと世間話を始めた。中学生だった僕は、(何が紅くなつたんだろう?)と車窓から探してみた。とんぼが秋風に流されていたものの、よくわからなかつた。そのうち飽きて探すのをやめた。

東北本線の運転士だった父が亡くなって七年になる。

昨秋、妻と幼い娘とその東北本線に乗ることがあつた。列車が福島を通過して、不機嫌な娘をなだめながらフツと頭をあげたとき、車窓にはある風景が広がつていた。それは、農協の大きな倉庫だつた。快晴の空の下で当たり前に佇んでいた。もうすぐ収穫されるリンゴやお米のために、重く高い倉庫の扉は開けられ、沈殿した埃の混じつた空気を入れ換えていた。

その周りの果樹園のリンゴ達が紅くなつてきていた。

(そうか、リンゴかあ・・・)と妙に合点がいつた。

(そうだよな・・・)無性にこの車窓を記録しなければと思つた。

「そんなことやつたつて、何にもなんねえぞ」

いつも、僕に対して説教じみていた父の声が、聞こえたような気がした。